

移動教育委員会(県立長崎鶴洋高等学校)

令和三年十一月十日(水)

「移動教育委員会」は、県内の教育現場の視察を行うことで、県の教育の現状と問題点を的確に把握し、教育行政の充実を図るために行います。今回は、県立長崎鶴洋高等学校を訪問しました。長崎鶴洋高等学校は、長崎県下に一つしかない水産科と総合学科を併設する単位制の学校です。

水産科では、2年次から進路に応じた分野を選択し、専門的な学習や実習を通して、「海のスベンチャリスト」を目指すことができます。

総合学科では、2年次から希望する進路に応じて、進学、機械、情報ビジネスの中から選択して学習することが出来ます。県内の総合学科で工業系の系列があるのは、長崎鶴洋高等学校だけです。



長崎鶴洋高等学校の正門(ホームページより)

「未来を拓く」特色ある教育活動

授業の視察で体育館へ。
なんと、体育館の中をドローンが飛び回っているではありませんか。操縦しているのはもちろん生徒。ドローンを巧みに操って、高さを制御したり、障害物を避けて飛行するようプログラミングしたりしていました。

これは、「総合的な探究の時間」の授業の一環として行われており、それぞれの学科の特性に応じた内容を学習し、地域や地元企業との連携した取組を行っているものです。実社会と連結させた活動を行い、生徒にドローンを活用した新しい仕組みづくりについて考えさせるのが、この授業のねらいです。具体的には、ドローンを活用した新たな漁法(スマート水産業)として漁業における定置網の設置確認、水中ドローンを利用したサンゴの生息域調査、また、小学校卒業記念写真空撮ボランティア、防災対策、害獣対策など、生徒が将来にわたり主体的に地域に貢献する一員として活躍するための活動に取り組んでいます。



生徒が操縦するドローン。学習の目的や操作方法の説明も明朝でわかりやすい。

次に水産科の実習室へ。ここでは、水産海洋基礎実習が行われていました。ロープが切れてしまったときの修繕方法等、水産に関する基本的なロープワークを学ぶものです。一人ひとりが教師の指導のもと、真剣な表情で切れたロープ同士を編み込んでつなげていました。



修繕の方法は数種類ある。その時々状況や目的に応じた修繕方法を使い分ける。

PC室にいくと、総合学科ビジネス系列の生徒が、1人1台端末を使って「この当地クイズ」を作成していました。長崎県の各地域の観光地について、それぞれ担当して調べ、端末を使って作業に当たります。生徒に操作方法を教えるも、しながらクイズにチャレンジしたところ、クイズ感覚でタブレットを操作しながら県内の各地域の観光地について学ぶことができ、大変よい仕上がりでした。ここでもふるさとへの愛着と誇りを育てるための手立が取られており感心しました。

生徒は自分が作成したクイズの解説に積極的だ。主体性を感じた。



次は、総合学科機械系列の実習棟へ。溶接技術コンテストへ向けて生徒同士が互いにアドバイスしながら溶接の腕を磨いていました。また、総合発表大会へ向けたプレゼン資料やポスターの作成など、創造性が求められる活動にも意欲的に取り組んでいました。



1人1台端末を有効に活用。

最後に、水産科コンサルティンク分野の実習施設がある臨海実習場へ。この分野は令和2年度に新設され、「水産物を獲るところから、食べるところまで」の一連の流れを学び、漁業×食品加工×流通の6次産業を学び、幅広い仕事に対応できる人材を育てています。



稚魚を育てる取組について生徒が説明。

授業の視察を終えた後、生徒から、「フェイスシールド作製及び寄贈」「トラフグ商品開発」「ラスク商品開発」に関する活動報告を受け、意見交換を行いました。

フェイスシールド 作製・寄贈活動について

昨年度の総合学科進学系列の看護進学希望者3名の生徒が始めた活動で、コロナ禍で医療物資の不足が社会問題になっていることを知ったことがきっかけ。先生方の協力のもと、機械系列の生徒や後輩の参加など活動の輪が広がり、試行錯誤を繰り返して完成させ、地域の病院や保育園などに寄贈しました。

自分達の「おもい」を「かたち」にし、地域の人々に喜びと感動を与える素晴らしい学習活動になっています。

コロナ禍で消費低迷の トラフグを食卓へ

水産科の3年生の課題研究の一つ。長崎県の養殖トラフグは全国生産量全国一位ですが、コロナ禍で消費が低迷。何とか食卓へ届けたいと商品開発へ。「生ハムづくり」を目標に、今までの実習で得た知識やノウハウを生かして試行錯誤を繰り返しました。さらに、養殖の過程で傷ついたり、間引かれたりして商品化されないトラフグを材料として使うことでSDGsにも配慮。調味液や食中毒の問題もクリアし、冷凍での販売が決定しています。

いりこ屋応援プロジェクト

水産科の昨年度の課題研究の取り組み。長崎県のいりこ生産量は全国一位。いりこの魅力を若い世代に伝え、長崎県のいりこ産業を応援する目的で商品開発を開始。顧客層を小学生に設定し、常温でも持ちのよい「いりこラスクづくり」を目標に開発を進めました。小学生からデザイン・ネーミングを募集し完成したものが「いりこ屋のラスク」として販売されます。



【教育委員の皆様からの講評】

1つ1つの発表が実社会と結びついており、とても感激しました。長崎鶴洋高校は地域に密着した活動をしており、商品開発における発想も素晴らしい。製造方法については特許申請も考えられるのではないのでしょうか。

コロナ禍で困っている方々のために自分たちができることは何か考えて、様々な方たちと幅広くつながり、一緒に活動されていることは、これからのSDGs社会にそのまま通じるものだと思います。

自分が高校生の時には、考えつかないような視点で取り組まれており、発想力や行動力の高さに感心しました。

このような素晴らしい取組をたくさんの方々に知ってもらえるよう、PRや販売、資金の調達の仕方なども併せて学習すると、さらに魅力のあるカリキュラムになると思います。

活動報告後、それぞれの活動を通して、何か自分たちの中に変容があったか尋ねたところ、生徒の方々からは、このような回答をいただきました。

フェイスシールドを寄贈する活動を通して、自分が地域社会の役に立っていることが実感できました。自分の中でボランティア活動への敷居が低くなった気がします。

高校に入る前は、地域の活動など考えたことはありませんでしたが、看護師になるための学習を通して、地域や困っている方々の役に立ちたいという思いが大きくなりました。

料理が好きで、自分が作ったものを食べてもらい、おいしいと感じてもらえることに喜びを感じています。商品開発に関わり、たくさんの方から、これからのキャリアに生かせるようなことを学ぶことができてうれしいです。

学校の先生だけでなく、企業や漁業関係者の方々から教えていただける機会がありうれしかったです。大きなことを成し遂げるには、自分たちの力だけで限界があり、いろいろな方々と協力していくことの大切さを学ぶことができました。



今回の移動教育委員会で、あらためて思ったのは、「勉強する」ということは、「どういつ」となのか」ということでした。次代を生き抜いていく子どもたちが、真に学ぶべきことはどんなことなのだろうということを考えさせられるよい機会となりました。

長崎鶴洋高校では、生徒の学ぶ内容や進路も様々であり、先生方は大変なご苦労をされていると思います。しかし、生徒がいきいきとしてチャレンジをしている姿からも、先生方の並々ならぬ努力の成果が表れていることがわかりました。

先生方には生徒のため、引き続きご尽力いただきますようお願いいたします。

私たち県教育委員会も、今回把握した学校の様子をもとに、県教育行政を充実させていきたいと思えます。長崎鶴洋高校の皆様、ありがとうございました。

